



Title	地域住民の外国人との交流・意識とその変化：群馬県大泉町を事例として：序章 問題の所在とねらい
Author(s)	小内, 透
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 22, 1-6
Issue Date	2006-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22663
Type	departmental bulletin paper
File Information	22_P1-6.pdf



序 章 問題の所在とねらい

第1節 問題の所在

国連経済社会局人口部は『補充移民（Replacement Migration）——人口の減少・高齢化は救えるか』というタイトルの報告書を20世紀最後の年2000（平成12）年に公表した¹⁾。この報告書では、少子高齢化が進む先進国で21世紀前半に総人口や労働力人口が減少し、それを移民で補うとしたらどのくらいの数が必要になるかが示された。フランス、ドイツ、イタリア、日本、韓国、ロシア、イギリス、アメリカの8カ国と、ヨーロッパ連合（EU）、ヨーロッパ全域を対象として、総人口、15歳から64歳までの生産年齢人口、65歳以上人口に対する生産年齢人口の比率（扶養人口指数）の3つの指標それぞれについて、1995（平成7）年の水準を維持するために、2050年までにどのくらい移民が必要か、その数を各国・地域ごとに推計した。その推計によれば、日本の場合、1995年の総人口を維持するには毎年約31万人、生産年齢人口を維持するには毎年約60万人、扶養人口指数を維持するには毎年約1,000万人の移民を受け入れる必要があるとのことである。

ここで示された数字は、あくまで一つのシミュレーションである。国連の推奨する目標でもない。しかも、これだけの移民を受け入れるのは、現実的に不可能である。だが、予想されたとおり、日本の人口は2005（平成17）年には減少に転じたといわれ、もし人口、生産年齢人口等を維持しようとすれば、現在取り組まれている少子化対策だけではなく、ある程度の移民の受け入れもやむをえない状況に立ち至っている。

日本国内においても、2000年3月に政府が公表した「出入国管理基本計画」には、「経済社会の活力の保持、社会生活の有形・無形の豊かさの向上」のためには、「どのような分野に外国人を迎えたいかという受入れの範囲、どのような経験や背景を有する外国人とであれば円滑に共生していくことができるであろうかという条件、そして受け入れた外国人にどのような社会生活環境を提供していけるかという処遇の問題などを徐々に緻密に調整しつつ、社会に摩擦をもたらさないような形での受入れを図っていくこと」が必要であるとの考えが表明されている²⁾。慎重な形ではあるが、外国人労働者の受け入れ推進の姿勢が明確に示されている。

財界を代表する日本経済団体連合会（経団連）も、2004（平成16）年に『外国人受け入れ問題に関する提言』と題するレポートを公表している³⁾。そこでは、専門的知識や高度な技術をもった「高度人材」だけでなく、看護や介護など特定の分野を中心に「いわゆる単純労働者」も含めた外国人労働力の受け入れが必要だとされ、そのために、「外国人雇用法」の制定等による新たな外国人就労管理制度の導入、外国人の子弟教育の充実、外国人政策を総合的に調整・立案する「外国人庁」あるいは「多文化共生庁」の設置などが必要だと提言されている。2004年に豊田市で開催された外国人集住都市会議（後述）でまとめられた「豊田宣言」にも、この経団連の提言を支持するという文言が盛り込まれている（外国人集住都市会議 2004）。様々な条件や受け入れ態勢の整備が必要であるが、秩序あるコントロールされた外国人労働力の一定の受け入れは必要だとの認識が、広がりつつあるとあってよい。

一方、現実には、すでに1990（平成2）年の入管法改定以降、ブラジル国籍、ペルー国籍などの外国人が数多く入国している。改定された入管法によって、日系3世とその配偶者に適用される

「定住者」という日本での活動に制限のない新たな在留資格が設定されたからである。日系1世の配偶者や日系2世が取得できる、従来からあった「日本人の配偶者等」も「定住者」資格と同様、日本での活動に制限のない在留資格であり、この二つの資格を取得したブラジルやペルーの国籍をもつ外国人が大量に日本に入ってきた。このうち、1～3世の配偶者には日系人でない者が含まれ、2世・3世にも日本語を使えず日本の生活習慣になじみのない者が多かった。

とりわけ、ブラジル国籍をもつ日系人およびその配偶者の増加が著しく、1978（昭和53）年に2,250人しかいなかったブラジル国籍の外国人登録者は、2004年末には286,557人にまで増加した。外国人登録者総数に占める割合も、0.3%から14.5%に上昇し、韓国・朝鮮籍（30.8%）、中国籍（24.7%）に次ぐ位置を占めるようになってきている（法務省 2005）。ブラジル国籍の外国人（以下、ブラジル人）は1990年の入管法改定以降、15年間、ほぼ一貫して増加し続けている。ブラジル人たちの中には、日本での滞在が長期化し、「永住者」ビザを取得する者も多くなり、ブラジル人が集住する地域では一戸建ての家を購入する者も現れている。定住化傾向を示すブラジル人が確実に増加しつつある。

ところが、彼らが居住する地域では、なかなか日本人との交流が進まず、日本人とブラジル人の良好な関係が構築されにくい。むしろ、ブラジル人などのニューカマーが集住する地域では、様々な問題が現れている。ゴミ出し、騒音、学校に行かない不就学の子ども、無免許運転、車の無保険・無車検など、いずれの集住地でもよく耳にする。他方で、外国人の社会保障、教育保障、人権保障が制度的に未確立だという問題もある。日本人、外国人双方にとって問題が山積しているのが現状である。そのため、2001年にはニューカマーを中心にした外国人が集住する都市を中心に、13の自治体が外国人集住都市会議を結成し（2005年現在15自治体）、「多文化共生社会」の実現を目指し、地域が抱える共通の問題の検討と外国人受け入れのための条件整備に関する国への訴えを行うようになってきている。

ブラジル人が集住する地域では、国連が提起し、日本政府や日本経団連が提言している外国人労働者の受け入れが、明確な受け入れ態勢を作らずに進められた場合、どのような結果を生み出すのか、また同時に、そこでは何が解決されるべき課題なのかが浮き彫りになっている。

ただし、同じニューカマーを中心にした外国人が集住する地域であっても、外国人の置かれた状況や外国人に対する日本人の受けとめ方には、様々な違いがある。表面的には同じ現象があっても、それへの対処の仕方や認識のあり方は地域によって異なる。外国人の国保加入を認める自治体とそうでない自治体があるし、自治体によって行政支援のあり方に温度差もある。

われわれは、これらの点をふまえ、ニューカマーを中心にした外国人が集住する代表的な地域を選び、外国人の増加に伴う地域社会と地域住民生活の変化について、比較検討することを課題として設定した。

本報告書は、この課題にこたえるため、まずはじめに、代表的な外国人集住地の一つである群馬県大泉町に住む日本人住民を対象にして実施した、「外国人居住者との交流と意識に関する実態調査」の結果をとりまとめたものである。

第2節 本報告書のねらいと構成

われわれは、1994（平成6）年以来、外国人集住地の中でも、ブラジル人等のニューカマーを企業と自治体が積極的に受け入れてきた太田市および大泉町（以下、太田・大泉地区）を対象に、外国人の増加に伴う地域社会と地域住民生活の変化に関する実証研究を継続してきた⁴⁾。

1999年には、大泉町の町民に対するアンケート調査も実施している。したがって、今回のアンケート調査には、前回の調査から6年の間に生じた様々な変化を把握するねらいも含まれている。

もとより、今回のアンケート調査の直接的な対象者と前回の対象者は、異なっている。しかし、町民の外国人との関係の取り方や見方の全体的な変化を見る上で、今回の調査がもつ意味は大きいといえる。

第1章で詳述するが、大泉町は行政と企業が連携しながら、東毛雇用促進協議会を中心に日系人の受け入れと彼らの生活を保障する態勢を整えてきた。そのため、すでに「共生に成功した町」あるいは「外国人住民と地域住民とのあいだに良好な共生関係がみられる地域」（駒井 1997：157）として高く評価され、平成10年度「世界に開かれたまち」として、自治大臣表彰も受けている。

早くから大泉町で外国人を対象にした調査研究を実施していた喜多川豊宇は、大泉町が「共生に成功した」要因として、地域住民の移動性や流動性が高く、外国人を含めて様々な人々が入り出てきた大泉町独特の歴史（本報告書第1章、参照）とそれにもとづく「棲み分け」という「共生の作法」があると指摘した。

喜多川は、次のような町民の声で、それを代表させている。「大泉町の住み分けは、戦前の中島飛行機時代からのノウハウ。全国から季節工が来ていたし、朝鮮からも働きに来ていたし、地元民は、それらに干渉しないよう、うまくやってきたんだ」（喜多川 1997：123）。「ノウハウ」としての「住み分け」あるいは「棲み分け」が地域社会を維持・発展させる「共生の作法」であるというのである。中島飛行機への朝鮮や台湾などからの徴用工、米軍駐留によるアメリカ人の存在など、外国人との接点が以前から多かった点、日本各地から中島飛行機や三洋電機の社員として日本人が多数流入している地域であるといった点が「異質」な人々を受け入れる土壌になっているというのである。「戦後まもなく、飛行場跡地に駐留していた米軍キャンプの影響によって地域住民の外国人アレルギーが比較的少ないのではないか」（岡本 1991：52）という岡本の指摘にも共通した見方が示されている。

しかし、これらの指摘は、この地域の実情を正しく反映したものとはいきれない。移動性や流動性の高いこの町では、地域の歴史と諸個人の歴史は必ずしも一致しないからである。実際、前回の調査結果から見ると、1960年代以降大泉町に来住した町民が7割弱、しかも昔から居住する者も含めて1990年前後からのニューカマーとの出会いが外国人との初めての接触である町民が多かった。

調査結果を分析した結果、喜多川が指摘したように、たしかに「棲み分け」の構造は存在した。しかも、それは外国人と日本人住民との間だけでなく、日本人住民内部においても見出された。しかし、それは、この町の歴史の中で住民の多くが外国人と接触し、その体験にもとづいて作り上げてきた「ノウハウ」といえるものではなかった。「棲み分け」の状況は主体的積極的に生み出されてきたものではなく、「寛容性」にもとづいて互いの立場を理解した上で構築された「共生のノウハウ」でもなかった。住民生活が三洋電機などの大企業によって成り立っていることに対して反発することができないという「妥協の産物」であった。

しかも、この妥協の論理は崩れつつあった。それは、外国人の数が増加し、地域社会にしめる割合が高まると同時に、「地付き層」と呼ばれる地元住民の割合が減少しているからである。さらに、ゴミや騒音、治安などの問題によって住民生活に不安が生じるなど、デメリットの面が大きくなりすぎたからでもある。

それでは、その後、6年の間に事態はどのように進展したのであろうか。6年前に見た事態は改善されたのだろうか。それともさらに深刻化しているのだろうか。あるいは現実はあまり変化していないのであろうか。また、それらの要因は何か。

本報告書では、上記のような問題意識をふまえ、現時点における大泉町民の外国人居住者との接触・交流のあり方、また外国人居住者との接触や交流に対する意識について検討していく。

その際、2005年8月に実施したアンケート調査（「外国人居住者との交流と意識に関する実態調査」）のデータと同年9月に実施した町民に対する面接調査（「大泉町民の外国人との交流に関する実態調査」）のデータを用いる。アンケート調査は大泉町の有権者、約1,500人を対象にして、2005年8月に郵送調査の形で実施され、540人の方々から回答をえた。さらに、9月にはアンケート回答者のうち協力をえられた24名の方々に対する面接調査を実施した（詳しくは、第2章参照）。

今回の調査は前回の調査から6年後の変化を見るところに一つの主眼が置かれた。ただし、前回調査に用いた調査票でわかりにくい箇所や時間の経過に伴って変えたところもある。そのため、項目毎の変化を見るというスタイルだけで分析しているわけではない。むしろ、全体として、6年間の変化が浮かび上がるようにこころがけた。

以下、第1章で大泉町の歴史と概況を整理し、第2章で日本人住民の地域生活の特徴、第3章で外国人との交流の実態とそれに関する意識を明らかにした上で、第4章で面接調査結果を用いて外国人との共生のあり方に関する考え方についてまとめる。

注

- 1) 国連経済社会局人口部のホームページ、Department of Economic and Social Affairs, Population Division, United Nations (2000) およびDepartment of Economic and Social Affairs, Population Division, United Nations (2001)、参照。
- 2) 『官報』（号外第55号）平成12年3月24日、参照。
- 3) 経団連のホームページ、経団連（2004）、参照。
- 4) われわれがまとめてきた太田・大泉地区を対象とする外国人関連の成果として、酒井・小内・湯本・津田・小内純（1999）、酒井・小内（1999）、小内・酒井編（2001）、小内編（2002）、小内編（2003）、小内（2003）があるので参照されたい。また、太田・大泉地区に関しては、外国人関連以外のテーマでも、地域社会学の観点からいくつかの調査研究を行っている。それらの結果については、藤井（1997）、小内純（1997）、小内（1997）、湯本（1998）、小内（1998）、小内・古久保・小野寺・安部（1999）、藤井（2001）、小内（2001）を参照のこと。

参考文献

- Department of Economic and Social Affairs, Population Division, United Nations, 2000, "Replacement migration : is it a solution to declining and ageing populations?"
(<http://www.un.org/esa/population/publications/migration/migration.htm>, 2006. 2. 26).
- Department of Economic and Social Affairs, Population Division, United Nations, 2001, *Replacement migration : is it a solution to declining and ageing populations?* (New York : United Nations).
- 藤井史朗, 1997, 「群馬県太田市における製造業中小企業の存在形態——実態調査結果を中心に——」『調査と社会分析』No. 1、札幌学院大学人文学部社会調査室、149-183。
- 藤井史朗, 2001, 「太田市の中堅・中小製造業企業の地域社会的特質と経営志向」『調査と社会分析』No. 4、札幌学院大学人文学部社会調査室、362-374。
- 外国人集住都市会議, 2004, 「豊田宣言——外国人住民とともにつくる活力ある地域社会をめざして——」(<http://www.city.toyota.aichi.jp/kokusaikasuisinjigyou/03.pdf>, 2006. 2. 26)
- 法務省, 2005, 『平成17年版 在留外国人統計』財団法人入管協会。
- 経団連, 2004, 「外国人受け入れ問題に関する提言」
(<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2004/029/index.html>, 2006. 2. 26)
- 喜多川豊宇, 1997, 「ブラジル・タウンの形成とディアスポラ——日系ブラジル人の定住化に関する7年継続大泉町調査——」『東洋大学社会学部紀要』34-3、65-182。
- 駒井洋, 1997, 「解題」駒井洋編『自治体の外国人政策』明石書店。
- 岡本光治, 1991, 「外国人就業者の急増と地域行政、業界団体等の対応についての予備的調査——群馬県東毛地区」『新潟産業大学紀要』第6号、47-76。
- 小内純子, 1997, 「地方行政と住民組織——群馬県太田市の自治体—行政区—地域住民の関連分析を中心に——」『調査と社会分析』No. 1、札幌学院大学人文学部社会調査室、91-147。
- 小内透, 1997, 『調査と社会理論・研究報告書. 15 北関東工業集積地域の社会学的基礎研究 その1 工業集積地域における階級・階層構造と労働—生活世界』北海道大学教育学部教育社会学研究室。
- 小内透, 1998, 『調査と社会理論・研究報告書. 16 北関東工業集積地域の社会学的基礎研究 その2 工業集積地域における高校間格差と高校生の生活・意識』北海道大学教育学部教育社会学研究室。
- 小内透, 2001, 「群馬県の地域社会形成と産業的特質」『調査と社会分析』No. 4、札幌学院大学人文学部社会調査室、127-148。
- 小内透, 2003, 「在日ブラジル人の教育問題」石井由香編著『講座 グローバル化する日本と移民問題 第Ⅱ期 第4巻 移民の居住と生活』明石書店、216-233。
- 小内透編, 2002, 『調査と社会理論・研究報告書. 19 北関東工業集積地域の社会学的基礎研究 その4 外国人多住地域の教育と国際交流活動』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室。
- 小内透編, 2003, 『在日ブラジル人の教育と保育』明石書店。
- 小内透・古久保さくら・小野寺理佳・安部美佐, 1999, 『調査と社会理論・研究報告書. 17 北関東工業集積地域の社会学的基礎研究 その3 工業集積地域における児童・生徒の生活と親の

- 意識』北海道大学教育学部教育社会学研究室。
- 小内透・酒井恵真編，2001，『日系ブラジル人の定住化と地域社会』御茶の水書房。
- 酒井恵真・小内透，1999，「外国人労働者の定住化と地域社会」『地域社会学年報』第11集、ハーベスト社、38-56。
- 酒井恵真・小内透・湯本誠・津田光輝・小内純子，1999，「特集 日系ブラジル人の定住化と地域社会」『調査と社会分析』No. 3、札幌学院大学人文学部社会調査室、1-173。
- 湯本誠，1998，「自動車産業における協力会組織の形成と展開——富士重工業とスバル雄飛会の事例——」『調査と社会分析』No. 2、札幌学院大学人文学部社会調査室、1-25。

(小内 透)